

第 2 期 事前対応期 (平成 12 年 6/26 緊急火山情報第 1 号 ~ 7/14 噴火まで)

2-1. 火山活動

1. 火山活動の増加

01. 気象庁は、平成 12 年 6 月 26 日 19 時 33 分「噴火の恐れがありますので嚴重に警戒して下さい。」旨の緊急火山情報第 1 号を発表した。

気象庁は、平成 12 年 6 月 26 日 19 時 30 分に三宅島について臨時火山情報第 1 号を発表し、その後噴火の恐れがあることから同日 19 時 33 分「噴火の恐れがありますので嚴重に警戒して下さい。」旨の緊急火山情報第 1 号を発表。

6 月 26 日 22 時 30 分、気象庁は火山噴火予知連絡会を開催し、「島の南西部へマグマが貫入している可能性が高い」としつつも、「南東部の可能性も否定できない」とし、「島の南部について噴火に伴う溶岩の流出に対し警戒が必要である」とのコメントを発表(臨時火山情報第 3 号)。

6 月 27 日 0 時 20 分には、気象庁は、震源分布及び傾斜計データの分析結果から「マグマは山頂の西方～南西方向の山頂に貫入していると考え」とし、「山頂の西方～南西方向の地域では噴火に対し警戒が必要」との火山噴火予知連絡会のコメントを発表。(臨時火山情報第 4 号) [『平成 12 年(2000 年)三宅島噴火及び新島・神津島近海地震について』内閣府(2003/9), p.1]

02. 気象庁は、「6 月 27 日海底で噴火が開始した可能性がある。」と発表した。

6 月 27 日 11 時 30 分には、気象庁は「既に海底で噴火が開始した可能性があり、今後噴火が活発化して水深が浅い所で噴火した場合には強い爆発となる可能性もある。」とする一方、「なお、西山腹での噴火についても否定できない」との火山噴火予知連絡会のコメントを発表(臨時火山情報第 5 号)し、今後の警戒を呼びかけた。

6 月 27 日 17 時 30 分、気象庁は、「マグマの活動域は西方海域に中心を移しつつあるが、海岸付近での噴火の可能性は依然として残されている。島の東部での噴火の可能性は極めて低い。従って、西海岸付近から海域での噴火にしばらくは警戒が必要である。」旨の火山噴火予知連絡会のコメントを発表(臨時火山情報第 6 号)。(『平成 12 年(2000 年)三宅島噴火及び新島・神津島近海地震について』内閣府(2003/9), p.1]

03. 気象庁は、「6 月 29 日火山活動は低下しつつある。」と発表した。

6 月 28 日 17 時 45 分、気象庁は、「西方海域での火山活動に対しては、今しばらく警戒が必要である。また、沿岸西海岸付近では、噴火の可能性は、現時点では完全には否定できない。なお、島の東部及び山頂付近での噴火の可能性はないと考えている。」旨の火

山噴火予知連絡会のコメントを発表(臨時火山情報第7号)。

6月29日18時00分、気象庁は、「火山活動は低下しつつあり、今後、陸域及び海面に影響を及ぼす噴火の可能性はほとんどなくなったと考えられる」との火山噴火予知連絡会のコメントを発表(臨時火山情報第8号)。[『平成12年(2000年)三宅島噴火及び新島・神津島近海地震について』内閣府(2003/9),p.1]

6月29日、総理府地震調査研究推進本部(本部長:科学技術庁長官)の地震調査委員会は臨時会を開催し、「三宅島西方海域では、過去には1962年の活動のように、震度4及び5を含む活発な活動が一週間続き、その後1ヶ月程度で活動が収まった例があり、今回も同様に推移する可能性がある。」旨公表した。[『平成12年(2000年)三宅島噴火及び新島・神津島近海地震について』内閣府,(2003/9)p.6]

04. 7月4日から山頂直下の地震が観測された。

7月5日18時30分、気象庁は「4日から山頂直下の地震が観測されており、山頂部では噴気の増加や場合によっては火山灰の放出があるかもしれない。山頂付近では注意が必要だが、山麓に及ぼすことはないと考えられる」旨発表(火山観測情報第70号)。[『平成12年(2000年)三宅島噴火及び新島・神津島近海地震について』内閣府(2003/9),p.1]

05. 7月8日18時43分頃、三宅島雄山が噴火した。

7月8日18時43分頃、三宅島雄山が噴火した。気象庁は噴火の発生とこれに対する注意を呼びかける臨時火山情報(第9号、第10号)を発表。

7月8日23時20分、気象庁は、「山頂部の地震と地殻変動が継続していることから、今後も山頂で噴火が発生する可能性があります。このため、現段階では、山頂付近では注意が必要ですが、山麓へ影響を及ぼすことはないと考えられます」との火山噴火予知連絡会のコメントを発表(臨時火山情報第11号)。

7月10日、気象庁は火山噴火予知連絡会を開催し、9日に確認された山頂の陥没地形について「今回の山頂の陥没は、初期に貫入したマグマの移動等に関連し、地下に存在していた空隙へ、カルデラ底が崩壊したことによるものと考えられます。現在も山頂直下の地震活動及び地殻変動が続いていることから、今後も噴煙や噴石をともなう山頂カルデラの陥没現象が引き続き発生するかもしれません。当面、山頂付近では引き続き注意が必要ですが、山麓に影響を及ぼすことはないと考えられます。」旨の検討結果を発表(火山観測情報第81号)。[『平成12年(2000年)三宅島噴火及び新島・神津島近海地震について』内閣府(2003/9),p.1-2]